へき地・小規模校教育研究センター

へきけんニュース

平成30年12月18日発行　第57号

ホームページ　http://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/
メールアドレス　kus-hekiken@j.hokkyodai.ac.jp
☎ 0154-44-3291　FAX 0154-44-3292

札幌校のへき地教育論受講生が急増！
----- へき地校体験実習も好評価! -----

北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター
センター長　玉井　康之

札幌校では「へき地教育論」の講義を受講する学生が１７５名程に急増しました。へき地教育は札幌居住者にも関係する部分も多く、学生の中でも「将来関係するので興味があった」と期待されています。また、へき地校体験実習生も好評価で終了しました。

今回は札幌校の梅木へき地教育アドバイザーから「札幌校のへき地校体験実習報告」、「札幌校のへき地教育論の状況」についてと、岩見沢校能條へき研センター員からは「へき地教育と防災教育との関係」についてご紹介いただきます。

****

今年度の札幌校における「へき地校体験実習」が終わる！

へき地教育アドバイザー（札幌校）　梅木　登喜雄

今年度のへき地校体験実習は、例年通り、桧山、後志、空知、日高、上川、宗谷の道内６つの管内、１４の小中学校で３５名の学生が参加して行われた。学年は、２年生が２４名、４年生が１１名である。男女別では、男子が１２名、女子が２３名であった。毎年、女子学生の方が応募も多く、倍近い比率になっている。学校にとっては女子の学生の方が丁寧で対応しやすいのか好評である。

さて、今年の札幌校の実習は、８月２０日～９月２１日までの期間で行われた。毎年そうであるが、実習期間中に一番心配されることは、台風などの自然災害による交通機関の乱れである。以前にはフェリーの欠航、JRの運休などで学生の足に大きな影響を与えたこともある。今年は特に、台風の他に胆振東部地震があり、それに伴った停電による学校の休校が目立った。この地震時には、本校の学生が５校で実習を行っていたので学校側も対応に大変苦慮されたようであった。そんな中でも学生に対する温かい対応は大変有難いことであった。また、学生にとっては災害時の学校の対応を学ぶ絶好の機会ともなり、いい経験ができたようだ。この結果、数校で実習期間を短縮して実習を終えたが、どの学生にとっても思い出に残る実習となったようだ。

札幌校では、実習報告会が１０月２６日に開かれ、全実習校のプレゼンを通して、次年度の実習対象学年である１年生（後期へき地教育論履修学生）が見守る中、発表を行い、来年の実習へのアピールをしてくれた。現在、実習生は学校からの実習手帳が届き、各学校が適切に記載してくれたコメントを参考にしながら、最後の仕事である「個人報告書」の作成を行っているところである。お世話になった学校の先生方へのお礼も含め、実習の成果や課題等について整理し、当該の先生方に読んでもらうために丁寧な報告書作りに専念している。４月の実習への応募から始まり、選考、事前指導、実習、報告会、個人報告書の提出、そして一部であるが３月のフォーラムの発表とおよそ１年をかけた実習の作業がもう少しで終わろうとしている。４年生の卒論作成或いは後期の講義のレポート作成など、相変わらず多忙の学生達ではあるが、一つの区切りを間近にして実習の余韻を大事にしながら最後の取り組みを終えてほしいと願っている。

****

防災・減災教育からみたへき地教育の可能性

へき研センター員（岩見沢校）　　能條　歩

先日の北海道胆振東部地震では、札幌近郊でも被害を受けた地域があったため、震央が都市部ではなかったにも関わらず多数の道民が揺れによる直接被害を受けていたものと考えられます。さらにその後に起こった大停電（いわゆるブラックアウト）では全ての道民が被害を受けたと思われますので、今回の地震災害は一つの自然災害で全県単位での被災があった稀有な自然災害といえるのではないかと思います。面積からいえば日本の5分の1が被災した大災害でもありました。私はへき地に住んでいて、自宅は震央から近いところにあったため揺れもかなり大きなものでした。地元の人との情報交換によれば、室内の壁の崩落や浄化槽の浮き上がりなどの建造物被害も結構発生していました。しかし同じ自治体内でも少し離れた地域ではさほど揺れなかったところも多く、私の居住する地域の被害は他の地域に比べてかなり大きかったようでした。このような集落のある地区によって災害の実情が大きく異なっている様子は災害発生直後にボランティア活動を実施するために被災地を回った際にも見られました。

私の住む集落では、小学校がすでに統合されてしまっており、日常的なこどもの居場所は遠くにあります。現在元の学校の建物は老人ホームに転用されていますが、今も昔も変わらずこの地域の避難所に指定されています。学校があった時は地域の人もそこに集うことが年に数回はあったので、避難所に指定されている学校の様子もよく把握できていたと思いますし、地域の人どうしの接点もありました（しかし実際のところ、この元小学校は川の隣にあるため、洪水時などの被災時に川の横にあるこの避難所に向かって避難することなど誰も考えていないと思います）。現在もここは避難場所に指定されたままですが、老人ホームに転用されていて昔に比べて地域との関わりが希薄化しているうえ、多くの避難者を許容できるようになっているとはとても思えません。近年行政がホームページに掲載した洪水氾濫危険区域図（水害ハザードマップ）を見ると、この地域は10m程度の浸水深がありえるとされていますので、ここへの避難は全く現実的ではないことがはっきりしていますが、以前から避難するつもりの住民がいないためか特に問題化していません。「避難所に行けば何とかなる」という考えの人が少なく、「いざという時には自分で何とかしないといけない」という考えを持っている人が多いとしたら必ずしも悪いことではないのかもしれませんが、「水害ハザードマップを見ることもなく何の意識もしていない」という方も少なからずいるのではないかという懸念はぬぐえません。いずれにしても、防災・減災に関することは地域の個別の状況を踏まえて考える必要があり、一律に学校を避難所に指定しておけばいいというようなことでは意味がないばかりか、かえって危険度が高まる可能性すらあるという事例ではないでしょうか。

へき地の学校（特に小学校）は、特有の地形や自然・歴史を反映して成立した地域ごとに設置されている場合が多く、だからこそ「地域素材を生かした教育」ができる可能性が高く、かつそれに力を入れる意味もあったのだと思います。地域とともにすすめる防災・減災への取り組みにも、地形区分や過去の災害・ハザードマップなどを意識した教育活動が必要です。へき地校は地域と一体となった学校運営にも力を入れつつ実践を深めてきた経緯があると思いますので、これまで推進されてきた「地域素材を生かした教育」に地域防災・減災につなげるという視座を取り入れ、こどもの学びを地域へ広げていくことについても、とても大きな潜在的可能性があるものと思います。

地域を学ぶ学習を土台にすれば、新たに大掛かりなカリキュラムの改変をしなくても日常の中に防災・減災教育につながる体験的な学習を埋め込むことは可能ではないかと思います。たとえば、運動会や学習発表会の「ネタ」に防災関係の活動を入れてみてはどうでしょうか。マラソン大会のコースを避難経路に設定したり、参観日には避難訓練を保護者と一緒にやるとか、学校が避難所になった場合の使い勝手のチェックや給食のかわりに炊き出しの練習をしてみる、などはどうでしょう。総合学習で地域の危険箇所や災害弱者の方の居場所を調べたり、地形の特性からくる災害の起こりやすさと過去の歴史にみる被災状況などからマイハザードマップ作りを手がけてみるというのも可能でしょう。新たに防災・減災の授業を起こすことも必要ですが、このように日常の中に学びを埋め込むことも、工夫次第で可能ではないかと思われます。

以上述べてきたように、自分の命は自分で守るという意識を持ち、主体的に行動できるようになるための体験的学習を行うにあたって、へき地教育にはとても多くの可能性があると思われます。もちろん、すでにそういった活動を実践している学校もたくさんあることと思いますので、よい実践事例を共有し、「へき地教育は防災・減災教育が充実している」ということが一般にも認知されるような状況になれば、へき地教育は安心・安全な地域づくりにも大きく貢献するものと思います。「こどもの数が減ったら統合されて無くなってしまう」という弱い立場の学校から、「地域の学校が減ることは防災・減災の観点からもリスクが大きくなること」という認識への転換が促されれば、安易な統合には歯止めがかかるかもしれませんし、小規模教育の利点として防災・減災教育が充実することをアピールできる可能性もあります。学校の存在意義は、いわゆる学業や昨今取りざたされている学力問題の解決のためだけではないはずです。繰り返しになりますが、命を守るための教育活動をこどもたちから地域に広げていくことは、学びの意味を実感させることでもあり、また状況の中に学びを埋め込むことでもあります。へき地教育にはそういう喫緊の課題を解決しつつ、大きな特色ある教育を生み出してまちづくりに貢献できる場となる大きな可能性があると思います。大学としても、そういった側面からへき地教育に関わりを持ち、さまざまな地域性を抱える北海道の防災・減災教育の事例を共有することで、へき地教育の実践から全国に向けた教育資源を生み出す支援をしていけたら、と今回の自らの被災体験を振り返って思っています。

****

次年度の実習に向けた「へき地教育論」が始まる！

へき地教育アドバイザー（札幌校）　梅木　登喜雄

後期「へき地教育論」の講義がスタートした。札幌校はこの講義を例年金曜日の４講に行っている。今年度は、釧路校の川前准教授にも一部の講義を担当してもらうことになり、受講生にとっては例年と違った内容の講義に触れる機会となっている。最近、学生の実習が多様化し、いつもより受講生が少ないと踏んでいたが、結局、１７５名の学生が履修登録をして現在講義を受けている。今年度の学生の出身地を見ると、札幌市内の学生が全体の４６％、その他の道内の市町村出身が４２％、そして、道外出身が１２％ととなっている。

講義の初めに、指導の参考にするためにアンケートを取ってみた。主な内容を挙げてみると、以下の通りである。①「へき地教育」への興味・関心　②卒業後、へき地・小規模校への就職の希望の有無　③来年度のへき地校体験実習への希望の有無・・・等である。

結果は、①については、約６割の学生が大いに興味があると返答し、その他の学生も興味を示している。ただ、単位不足や単位の取得が容易なことから受講している学生もいるので、大いに興味があると返答した学生数が学生の本音に近いかもしれない。②については、時期的なこともあり、決まっていないという返答が多いことは予想していたが、卒業後の希望にへき地・小規模校での就職を考えている学生の有無をあえて質問してみた。結果は、全体の３２名、１９％の学生が希望していることが分かり、はっきり希望しないと答えた学生８名の５％に比べてへき地校への一定の志向が感じられた。しかし、７６％の学生はまだ分からないと答えている。③については、次年度の「へき地校体験実習」についての希望者が１０１名、６０％となっていて、多くの学生がへき地校実習について希望していることは嬉しい限りである。以上が今年度の受講生から得たアンケート結果の一部である。

北海道教育大学のへき地校体験実習については、札幌、旭川、釧路の３キャンパスで実施しているが、その対応についてはそれぞれに特徴がある。札幌校は、へき地校体験実習Ⅰは２年生・４年生、Ⅱを４年生を対象として実施している。また、実施に当たりカリキュラムでは１年の後期で「へき地教育論」、２年の前期で「へき地教育指導法」の講義を設け、この二つの講義履修が実習の条件となっている。最近は、特に学生の実習が多様となり、希望はしていても他の実習と重なるため、選考時にへき地校実習への参加をあきらめる学生が多く見られるようになっている。

受講にあたって、学生の志望動機に軽重はあるが、へき地教育への興味・関心があってのものとすると、対応している私どもとしては有難いことと受け止めている。また、実習を終えた多くの学生は自分自身が満足するだけでなく、後輩にも実習を勧めている姿を見ると、へき地・小規模校の多い北海道としては意義ある体験実習であると改めて思っている。昨年度、不採用だった札幌出身の学生４名が、自ら臨んで宗谷、オホーツク、上川、十勝管内のへき地・小規模校で期限付き採用として活躍している。実習校訪問の際に、お邪魔してみると複式学級の担任として立派に教壇に立つ姿も見ることができた。これらの例からも「へき地校体験実習」から得た貴重な経験が学生の進路に少なからず影響を与えていることは確かである。

札幌の大規模校で育った学生が、受講希望の理由に、「いろいろな学校を見て、教師になっていきたい。」という思いが多数あることを大事にしながら、後期の講義を進めていきたいと強く思うところである。

「へき地教育論」講義中における小規模校の特性についてグループ交流している様子